

わいわい、みんなと集りたい。人と人がつながっていく家



「岐阜県E市在住」

玉ちゃん先生 ログハウスに住む



「ただいま」って深呼吸。
笑顔と木の香りが迎えてくれる。



心もからだも、自然で元気がいっぱい。笑顔もやる気もそこがスタート

おじいちゃん、おばあちゃん、子ども達。家族みんなで外壁塗りもしました。子ども達も積極的に家事に参加するように。これからは、これからの計画もたぐりなどの計画もたぐさん。家族と共に育っていく、本当の我が家だと実感しています。ログハウスって面倒なこともあるけれど、それも含めて楽しみたい。だって人生ってそんなこと繰り返すんですよ。これからの子ども達に伝えたいのも、そんなこと。心もからだも元気であれば、少々の困難は楽しみに変えられるはずですから。人と人とのつながりを大切に、いろんな人と集っていききたいですね。

私たちはログハウスの夢木香です。
夏涼しく、冬暖かい。梅雨の季節もカラリ。自然の摂理が生きている家、それがログハウスです。私たちは、フィンランドから学び日本の風土に合う独自のログハウスづくりを目指しています。本当に大切なものを見て感じる、考えること。人を育てるという先生の大きな使命は、私たちの信念にもつながります。ログオーナーに先生が多いというのは偶然ではないのかもしれませんが、今、未来に向かって本物を伝えていく時代です。



オープンハウス・見学会実施中

木々の香りに包まれて夢をはぐくむ

www.yumekiko.com

ゆめきこう
夢木香株式会社

愛知県名古屋市天白区鴻の巣1-1604

フリーコール 0120-690418

夢木香 岐阜

岐阜県美濃加茂市加茂野町鷹ノ巣1500-2 TEL0574-28-2299

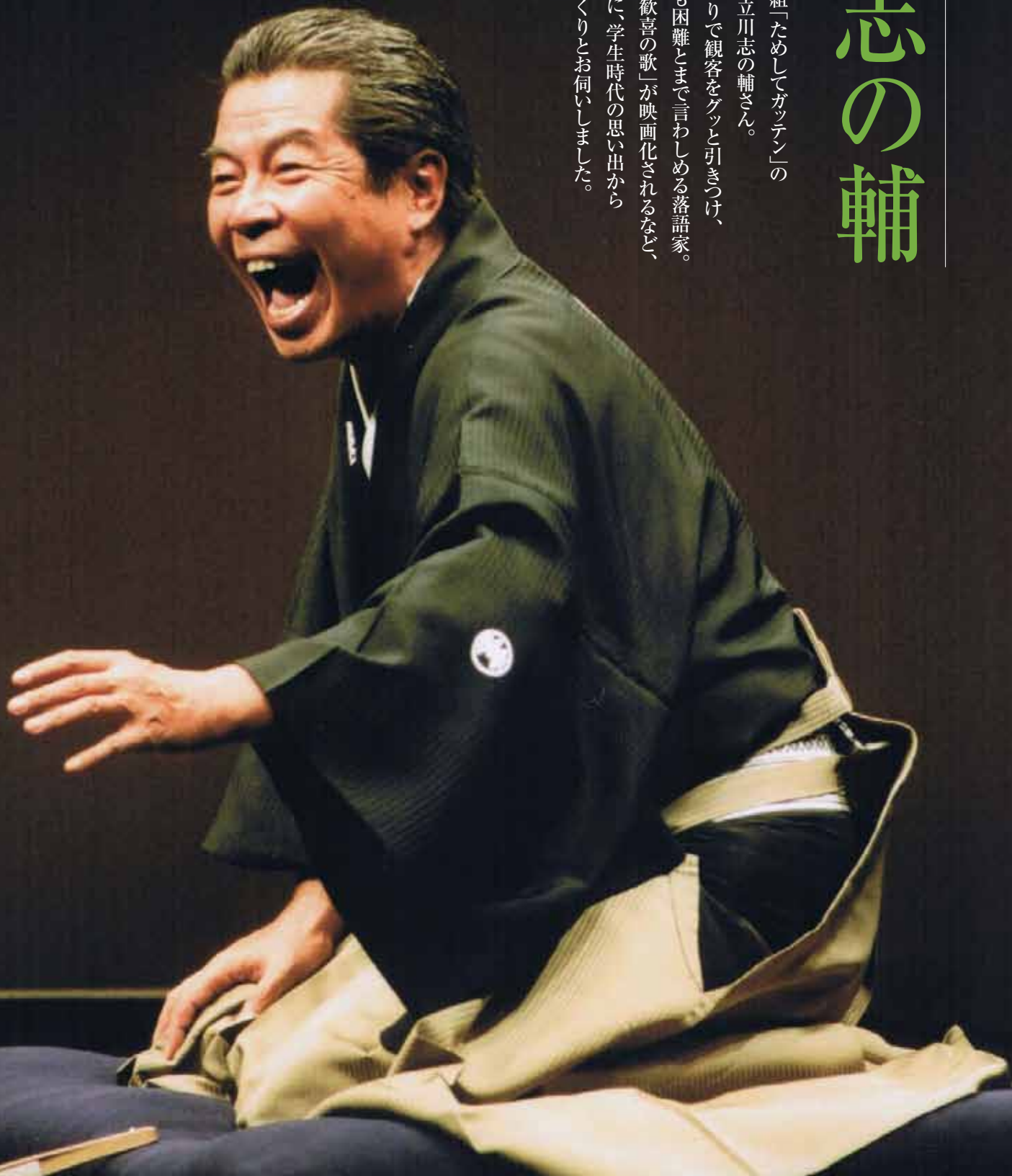
ISO14001-2004
(環境マネジメントシステム)
認証取得(本社)
審査登録番号 ISAE 033

hito*yume
インタビュー

巻頭特集

立川志の輔

放送15年目を迎えた人気番組「ためしてガッテン」の機知に富んだ司会で知られる立川志の輔さん。古典や創作落語を独特の斬り方で観客をグッと引きつけ、高座のチケットを取るのが最も困難とまで言わしめる落語家。昨年は自身が創作した落語「歓喜の歌」が映画化されるなど、多方面で活躍中の志の輔さんに、学生時代の思い出から近況に至るまでのお話を、じっくりとお伺いしました。



初めて大勢の人を笑わせた あの快感は忘れられない

子どものころから、みんなの前でモノマネをしたりして
人を笑わせることが大好きでした

みんなを笑わすことが 喜びだった少年時代

——志の輔さんが小学生のころは、どんな子どもでしたか？

とにかく、よくしゃべる子どもでしたね。わたしの実家は小さい商店街のど真ん中にありました。小学校から帰ってくるランドセルを家にほうりだして、そのまま近所の肉屋へ。店の対面ショーケースの内側に入って、店の人が包装した商品をわたしが受け取ってお客さんに渡す、釣り銭を店の人から預かってお客さんに渡すというような、店とお客さんの間に入るということをやって遊んでいました。50円の釣りを「はいっ！50万円」と言って渡すと大人が笑う。それを楽しいと思っていました。町内の人は、わたしがこの仕事に就いたことに何の不思議も感じていませんねえ。「口から生まれたような子どもだったからなあ」とみんなによく言われましたよ(笑)。

——学生時代、印象に残っている出来事はどんなことですか？

小学校の5年生のころ、夏休みの宿題に書いた作文で、初めて褒められたこ

も「ダンディな人」でした。「先生ってかっこいいなあ」と思った、最初で最後の教師でしたね。二枚目でスポーツ万能。生徒に対する接し方もすてきで、他の先生と比べると、生徒により近く踏み込んで話をしてくれた先生でした。合宿ではテニスの指導の話だけでなく、一緒に遊んで様々なものの考え方について話してくれたりして、いろいろと思いついて残る先生でしたね。

プロを自覚させられた 師匠・談志のひとこと

——現在の志の輔さんのことをお伺いします。お弟子さんに教えるという点についてお聞かせください。

今、自分が師匠と言われる立場になって、「教えること」の大変さを実感しています。

弟子の中には「話す」ことが得意ではなく、「素人以下の技術しかない」という弟子だっているわけですよ。その弟子が一生懸命努力しても技術的には限界があります。で



入門して2年目の志の輔さん

すから、愛嬌、発想、気づかい、人に可愛がられる部分などで、何か人と違う部分を磨いてくれればいいと思っています。800人ほどいる落語界で、みんなとは「ここが違う、やっぱりプロだね」と言われる部分を、ひとつは持たないと食べていけません。「何が違うのか。何を違えるのか」そのことを追求して欲しいと願っています。

落語は誰にでもできるものだと思います。でもそこで、自分にしかできない何かをひとつ見つけて、「やっぱり違うよね」と言われるようになる。それをできる人が、本当のプロなんです。800通りの落語の形があっても、それはそれでいいんです。けれども「アマチュアとは違うよね」というその一点を、何をもうて観客に言わしめるかです。それがプロとしての自分の存在理由ですから。

自分にしかできない何かを ひとつでもいいから見つけて

落語家として「何を伝えたいのか」ということを意識することで
プロとしての自覚が芽生えました

わたしが師匠談志に教えていただいた中に、ビーンと響いていまだに消えずに自分の根幹になっている言葉があります。「おまえ、落語で何が言いたいのよ！」これは、入門してまだ1年目くらいのころに言われました。最初は「一生懸命に作品の話し方を覚えます。だけど次の段階で言われた言葉がこれ。「作品を語つても、何も言いたくないやつ、断言か聴きにくるやつがいるわけねえじゃんか」と。このひとこと、素人から玄人に意識が転換しました。そのことを今、同じようにわたしが弟子に伝えています。

富山が自分の原点 故郷にも活躍の場が

——昨年、富山市に演芸ホール「てるてる亭」がオープンしました。志の輔さんにとつての富山とは？

わたしの原点は富山なんです。現在は東京に住んでいますが、何年経っても私は富山県民。生まれて18年間慣れ親しんだ土地です。流れている富山の血は変えられませんからね。今でも富山の空港や駅に着くとホッとします。ありのままの自分は、やっぱり富山にあり、富山弁でしゃべっているときが、いちばん本当の自分に近いと思っています。



幼稚園のころの志の輔さん(左)と従兄弟

とがありました。

「朝顔には目があるのかな」という作文で、朝顔のツルが伸びて植木鉢に差しである竹の先端までいくと、次の日にはいちばん近くにあるものからむ。その様子を「ツルの先に目がある」という表現をしたら、先生に「詩」と言われまして。たいへん褒めてもらい賞もいただきました。特徴もない生徒で、バカなほうのグループに入っていましたから、とても印象深いですね(笑)。

中学3年生のときには、学校の代表としてピンチヒッターで出場した弁論大会で、優勝してしまいました。先生に急に呼ばれて「作文を書いて発表してこい」と言われ、合唱コンクールに出るため

に、いやがるみんなをまとめるのに苦労した、というような話を書いて発表しました。冗談も交えて話し、会場を沸かせました。当時わたしの生まれ育った富山の片田舎では、昭和40年ごろに弁論大会で笑わず、あるいは笑うということはなかった。好き放題しゃべっていたら会場から笑いが出まして……。大勢の前で自分の話で笑いが生まれたのはこのときが初めての経験でしたね。

——学生時代に一番影響を受けた先生は？

高校時代の体育の先生で、テニス部の顧問もされていた新保先生ですね。当時、高校生のわたしの目から見ると



小学校3年生のときの学芸会

扇子と手ぬぐいのはよし

落語家はその仕草の表現において、欠かせないものといえば、小道具として使う「扇子」と「手ぬぐい」です。扇子は噺の中で時に、箸や筆、手紙、煙管になります。片や手ぬぐいは、本や財布になります。落語家は高座で、この二つの小道具を巧みに使い、あらゆる世界を表現していきます。



志の輔さんにとっても、これらの道具は高座では必須。では、どのような思いで日ごろから使っているのか、伺ってみました。

本当は何もないほうが、いいんです。でも何もないと、これが本だ、これが煙管だとわかってもらうのが大変なので……。何も持たないと、噺家も力が入らないし、お客さんもイメージするのが大変だから、持っている、というところでしょうか。言い換えれば必需品ではあるけれども、突き詰めればいらぬものでもある、と私は思っています。でも正直なところ、かつて扇子と手ぬぐいを持たず、舞台上がってしまった経験がありますが、その不安たるもの、恐ろしかったです（笑）。まくら（落語の前につける短い話）の最中、「扇子と手ぬぐいを使わなくてもいい落語はないか……」と、そのことで頭がいっぱいでした（笑）。

落語家によっては、小道具の使い方に命をかけていらっしゃる方もいるかもしれません。この小道具ひとつとっても、いろんな考え方が許されている。伝統芸能ではありますが、落語はそれだけ僕が深いとも言えましょう。これから落語界が発展していく中で、この扇子と手ぬぐいの意味や重要性も変化していくかもしれません。その自由さも落語なのです。



立川志の輔（たてかわしのすけ）プロフィール

落語家。1954年、富山県生まれ。明治大学落語研究会に所属。卒業後、劇団員に。退団後広告代理店勤務を経て、83年に5代目立川談志に入門。90年、立川流真打ち昇進。08年、第57回芸術選奨文部科学大臣賞受賞。

現在は、古典と新作の両方を手がける落語家として、全国で公演を行うほか、テレビ、ラジオでも活躍中。



正解を見い出す過程が素晴らしい

正解をすぐに導き出すことも重要だけど「何だろう」といろいろ考え悩むことも大切

払って聴きに來るといのは同調しているという事です。噺を聴いて幸せであるという事です。自分が好きなことをしゃべっていて、どこかで幸せになる人がいるのならば、その数が増えれば嬉しいことです。

「親の顔」に込められた温かいメッセージ

——最後にになりましたが、今の小学校の先生に向けてメッセージをお願いします。

わたしが自分の子どものためにつくった「親の顔」という落語があります。テーマは「世の中に正解はあるけれど、正解だけが世の中じゃない。いちばん大事なものは正解を考えようとしたときに、いろ

いろと思いつく幅があるということが、とても大事なことです。考えたらずくに正解が導きだせる頭のいい人、それは必要な人です。でも、正解って何だろうと考えたときに、「こじやないか、あじやないか」と言えるのが豊かな人なのだと思います。

わたしたちの世代は、その芽を育ててもらった、とはあまり言えません。つまり変な答えをしたときに、先生が「あはは」と笑って「そういうこともあるかもね」とは言ってもらえませんでした。「それは間違いだ」と言われておしまい、という時代だったような気がします。

落語の話の中にはいろんな考え方が出てきて、悪いことするヤツもいっぱい出てきます。でも、すべて「笑える悪いこ



と、なんです。そこがいちばん大事なところ。正解じゃないかもしれないけれど、それを考える子どものおれとか幅を、笑って受け入れられるゆとりが、授業や学校の中にあればすてきなと思います。できれば（先生方には）落語家を支えてくれるような子どもたちを育てていただきたいですね（笑）。

1996年から毎年1月定期公演「志の輔らくごinパルコ」を渋谷PARCO劇場にて開催

平成14年から、富山県出身の芸能人を集めて「越中座」という寄席形式の公演を富山県で開催しています。その中で、富山弁で落語をやってみたら、たいへん喜ばれました。また自分の故郷に落語を聴いてくれる人が増えれば嬉しいと思います、27年間で1000回近く、毎月のように地元で落語会をやってきました。その結果、地元の銀行さんが、閉館した映画館を改装して「てるてる亭」をつくってくれました。わたしの本名・竹内照雄にちなんで命名しました。「てるてる亭」は256席の小さなホールで、お客さんの顔が間近に見えます。富山での公演でやっかいなのは、自分の小さい

ころを知っていたり、調べたら遠い親戚だったという人たちがいつどこにいるかわからないこと。いやですね（笑）。現在は、月に1回私が落語をやるだけですが、将来的にはいろんな芸人さんが舞台上がってくれることを望んでいます。

——今後はどのようなことに取り組んでいきたいとお考えですか？

英語で落語を演じてみたいですね。丸覚えで3席ぐらいいは演じたことがあります。英語を自由に操って、英語圏で外国人を相手にしながら公演するというのが夢ですね。

噺を聴いて幸せになる人が増えれば嬉しい

お客さんは、噺家に同調しないと笑ってくれない。これからも、もっとたくさんの人に笑ってもらえるように年を重ねていきたい

海外では「日本人の文化は曖昧でよくわからない」と言われている中で、「いや、そうじゃないんだ」と。日本人の文化は曖昧ではなく、欧米のように人種のるつぼで急いで作られた国とは違う、その部分を落語で伝えられたら嬉しいですね。世界中で実現できたらいいなと思う反面、物理的にこれから英語を覚えなきゃいけない。かなり厳しいかなとは思いますが（笑）。

芸人としては、「高座に座る姿そのものが一枚の絵であり、落語である」とまで言われたら5代目古今亭志ん生を目指したいですね。これから年齢を重ねていくにつれ、少なくとも技術や音量、脳の回転など、肉体的には衰えていきます。元気とか調子とかテンポとかバイタリティーとかエネルギーとか、そんなものでももうお客さんを笑わせられない。終着点は、極端なことを言えば、歩いて高座までも行けない。でも弟子に背負われて、座布団にちよこんと座る。「それでもいいよ。お前が来てくれただけで」という感じですかね。そうなれば最高。究極でしょうね。

落語は、噺家に同調しないと笑えません。いわば宗教みたいなもので、反感する人には笑えない。憎たらしい人には金を払って来ませんから（笑）。お金を

